

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：34443

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14079

研究課題名(和文) 教育実践における自律性と科学性の関係に関する教育思想史的研究

研究課題名(英文) Research on history of educational thought on the relationship between autonomy and science in educational practices

研究代表者

田岡 昌大 (Taoka, Masahiro)

大阪青山大学・健康科学部・准教授

研究者番号：90804758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教育実践における教育者の自律性や主体性と科学性の関係の検討を目的とするものである。よりよい教育実践のためには科学が不可欠である。しかし、実践者自身の自律性も重要である。本研究では、この論点に対して、城戸幡太郎の教育思想研究を主な方法として取り組んだ。まず、戦後期の城戸幡太郎の「ヒューマニズム」が、教育研究ならびに教育実践を基礎づける概念であることを明らかにした。次に、その「ヒューマニズム」は、心理学との関係の中で強調されていたことを明らかにした。そして、「立場」「生活」といった概念が自律性と科学性の関係においてキーワードとなることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、次の点に要約することができる。1つには、教育実践における自律性と科学性のあるべき関係という論点を教育思想史上の文脈に位置付けた点である。2つには、その際の方法として取り組んだ城戸幡太郎の教育思想研究において、戦後期の城戸の教育思想研究という新たな視点を示した点である。3つには、教育心理学や他の教育思想との比較を通じて、自律性と科学性との「調和」を志向する上で「ヒューマニズム」「生活」といった諸概念が重要な位置にあることを明らかにした点である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the desirable relationship of between autonomy and science in educational practices. Science is essential for better educational practices. However, the practitioners are the ones to carry out the practices, and autonomy among practitioners are also important. The present study investigated this issue by conducting research on Mantaro Kido's educational thought. As a result, the following points were identified. Firstly, it was clarified that "humanism" in Mantaro Kido's educational thought during the postwar period is the concept that underlies educational research and educational practices. Also, the study revealed that the "humanism" was emphasized in relation to psychology. Finally, it was shown that concepts such as " aspect " and " life " are keywords in relation between autonomy and science.

研究分野：教育学

キーワード：教育科学 戦後教育学 城戸幡太郎 教育実践 ヒューマニズム 生活

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

教育実践を基礎づけるものとしては、実践者自身の自律性と、それを支える科学性とを考えることができる。自律性については、関連するものとして教育者に求められる資質能力をあげることができる。例えば「学び続ける教員像の確立」(文部科学省)に象徴的なように、時代の変化に対応しながら職務を柔軟に遂行するというモデルとして理解することができる。他方で、より良い教育実践のためには科学的知見も必要である。実践が行われるためには、教育現象の理解や、実践の妥当性の判断が必要となる。科学的知見は、実践を構想する上で重要な前提である。このことは、「エビデンスに基づく教育 (Evidence-Based Education)」に象徴的なように、今日では基本的な前提になりつつあるとあってよい。このように、教育実践を基礎づける知としては、教育者の自律性や主体性という要素と、教育現象の科学的な解明によるエビデンスや技術知を考えることができる。

本研究は、こうしたことを背景としながら、この両者の関係、すなわち「自律性」と「科学性」の両者の関係がいかにあるべきかという点を中心的な問いとして進められたものである。先行研究では、この論点について、ある程度包括的な検討が既に行われていた。例えば、今井(2015)は教育という現象の特殊性に着目した上で、「エビデンスと教育との間には必然的に空隙が生じる」ゆえに、「いかなるエビデンスにも確実な支えを見出すことはできない」と指摘している。しかしながら、「確実な支え」がないということは、不安定な状態であることをも意味する。その不安定性を回避するために科学的なエビデンスが求められるならば、結果として科学性が教育実践を規定してしまうことも懸念される。例えば、教育実践に大きな影響を与えてきた学問知として心理学をあげることができる。しかし、心理学には「教育実践と教育研究における言語とレトリックを無意識のうちに呪縛してきた」という面が指摘されている(佐藤 1998)。つまり、教育の自律性・主体性を求める過程が科学性を招来する一方で、科学性が教育の実践性を限定させてしまう逆説も想定することができる。これらの指摘を踏まえると、教育実践の自律性や主体性が求められる一方で、それらと科学との関係がいかにあるべきかということが論点となる。

この論点を検討するにあたって、本研究では教育思想史的観点からの検討として、特に城戸幡太郎の教育思想を中心的な検討対象とした。城戸幡太郎は、1930年代から戦後にまで日本の教育学(教育科学運動)に大きな影響を与えた人物である。その思想には、教育研究における科学性と規範性の関係、ならびにそれらと教育者の主体性の関係とが念頭に置かれている(城戸 1978)。また、こうした論点を心理学との関係の中で考察していた点も特徴である。しかしながら、城戸の教育思想に関する先行研究は多くある一方で、城戸の心理学と教育思想の関連を問うものや、戦後期のテキストを対象にした研究はそれほど多くはない状況にある。つまり、城戸幡太郎の教育思想を対象とすることで、教育の自律性と科学性の関係を考察した典型的な思想を通じた現代的な論点の検討が可能になる点と、それに加えて、城戸研究という点でも新たな視点によるアプローチとなる点と、2つの点で独自の視点を構成することとなる。

2. 研究の目的

本研究は、教育実践の自律性と科学性がどのような関係にあるべきかについて教育思想史的観点から明らかにすることを目指すものである。検討に際しては、特に城戸幡太郎の教育思想を中心的な検討対象とする。

3. 研究の方法

本研究は、前述の目的を達成するため、城戸幡太郎の教育思想研究を主たる方法をとる。

具体的には、戦後期の城戸が繰り返し強調している「ヒューマニズム」なる概念が、どのような含意を持っているかを明らかにする。戦後期の城戸のテキストは、先行研究ではあまり注目されていない。しかし、城戸自身が自らの立場を「ヒューマニズム」と称している点は、城戸の教育思想を検討する上で重要な点だと考えられる。また、この「ヒューマニズム」の議論は、城戸の思想における心理学に対する教育の関係を把握する上でも重要な点でもある。したがって、この点を足場にして、城戸の教育思想において心理学との関係の中がどのように位置づけられているかを検討することで、教育心理学と教育研究ないし教育実践のあるべき関係を明らかにする。他方で、他の教育思想と城戸の教育科学論とを比較することによって、城戸の教育思想の固有性を明らかにするとともに、その知見に基づいて改めて教育実践における自律性と科学性のあるべき関係について明らかにする。

4. 研究成果

本研究の成果は、城戸幡太郎の教育思想の検討を通じて、教育実践における自律性と科学性の関係の基底として、「ヒューマニズム」さらには「生活」概念があることを明らかにした点である。教育実践の自律性は科学性を抜きに成立しえないが、科学性のみでも成立しえない。その際に、両者の関係を規定するものとして「ヒューマニズム」「生活」の概念が考えられる。また、従来の先行研究では十分に明らかにされてこなかった戦後期の城戸幡太郎の教育思想の一端を明らかにした点も本研究の成果としてあげられる。

1つめに、戦後期の城戸幡太郎の「ヒューマニズム」概念である。戦後期の城戸は、たびたび「ヒューマニズム」を強調しているものの、先行研究ではその含意が十分に明らかにされていない（田岡 2017）。城戸によれば、「ヒューマニズムを自分のイデー（idee）として持つようになる」ことが、「教育の実践をやる場合に、いろいろな技術が生きてくる」前提としてあるのだという（依田ほか 1956）。しかし、この理念は単に科学性を斥けるためのものではなく、「人間というものを本当に理解すること」に関わる「事実」の把握のための前提としても述べられており、いわば科学的な立場と理念的な立場とを「調和」させるものとして述べられている。かくして、実践の自律性と科学性という両者の関係に対して、第三項として「ヒューマニズム」が位置付けられている。

こうした「ヒューマニズム」の強調は、戦後における新たな展開という面と、戦前期からの連続的な面とが指摘できる。管見の限り、城戸が自身の立場として「ヒューマニズム」を強調する傾向は戦後期の特徴である（例えば城戸 1950）。その特徴は、戦後の民主主義や政治的な対立も含めた価値対立を超えた、より高次の「立場」として強調する所に認めることができる。この点では、広く戦後思想との関係が認められる。他方で、教育実践や教育研究との関係という点では、戦前期の議論からの連続性も指摘できる。後にみるように、「立場」は宗像誠也もまた自身の教育研究法の中で重要視している概念である。城戸によれば、「立場」は、「事実」を把握する中で「自覚」されるもので、その結果として「問題」が発見されるのだという。いわば、「問題」が捉えられるところでは、「立場」という自律性と「事実」という科学性とが重ね合わさっている（城戸 1970）。また、こうした城戸の把握を踏まえた時、科学性は教育実践を支えるものであると共に、教育実践における「立場」を相対化する別の「立場」としての意味を持っていると指摘できる。なぜなら、科学もまた何らかの「問題」の解決を志向する際に生じるという点で「立場」を含んだものでもあるからである。こうした「立場」とその自覚という把握は、1920年代のテキストから晩年のテキストにまである程度一貫して認められるものである。

2つめに、城戸の教育思想と心理学との関係である。城戸の「ヒューマニズム」の問題は戦後期に特に強調されるものだが、そこで論じられる論点自体は戦前期からの連続性が認められる。戦前期には、既に『心理学概説』（城戸 1931）などの著作に垣間見ることができる。ここで城戸は心理学が人間を理解するための学問であることを強調することによって、心理学を単なる「事実」を明らかにする学としてではなく、「問題」を解決する学として位置づけている。また、「人間」を考究する学としての「人間学としての心理学」を「教育科学としての人間学」と位置付けるなど（城戸 1931）城戸の教育思想には教育学と心理学の関係という論点が前提にある。そして、こうした論点は晩年の「心理学への郷愁」（城戸 1968）においても議論されている。そこでは人間の存在を表す座標として「意識」、「精神」、そして「生活」を区別して、座標の転換が論じられている。こうした座標の問題は、いわば「人間を問題とする人間科学としての心理学」（城戸 1968）として構想されるものである。

こうした教育思想がより教育実践に関わる所として、教育心理学との関係という論点がある。ここで特に関わるのが教育心理学における「不毛性」の議論である。ここでいう「不毛性」とは、教育心理学研究と現実の教育（教育実践）との関係のあり方を反省的に問い直すことを通じて展開した論争である（サトウ 2002）。先述した「ヒューマニズムを自分のイデー（idee）として持つようになる」ことが教育実践において重要であるという指摘は、この点に関わる。

こうしたことから、次のことが言える。1つには、教育実践における自律性と科学性の関係は、両者が対立的なものであるというよりも、「立場」の自覚において「調和」されるものである。また、その際には「生活」という視点が重要になる。2つには、教育実践における自律性と科学性という現代的な論点は、思想史としてみればむしろ繰り返されてきた論点という面もある。また、その際には教育学と心理学の関係という論点が、一つの通底するものとしてあった。

3つめに、他の教育思想との比較検討である。本研究では、主に宗像誠也の教育科学論と、倉橋惣三の幼児教育論との比較検討を行った。宗像誠也との比較で注目したのは、『教育研究法』（宗像 1974）である。その中で宗像は、城戸の教育科学論に触れたうえで自らの教育研究法を論じている。ただし宗像が城戸の議論を抽象的な次元で把握していたのに対して、城戸の他のテキストを重ね合わせてみると、「立場」を規定する前提として「生活」があったことが指摘できる。他方で、城戸のいう「生活」概念が教育思想としてどのように特徴的なのかについては、倉橋惣三の幼児教育思想との比較によって明らかにした。倉橋との比較で注目したのは、『幼稚園真諦』（倉橋 1934）で強調される「生活」概念と、並びにその前提としての心理学との関係である。結果として、城戸にも倉橋にも共通して心理学批判が通底していることが指摘できる。つまり、教育実践と科学性の両者の「調和」を考える際には、「生活」という概念が媒介にあることが重要であることが指摘できる。

この「生活」という概念は、より具体的には「生活問題の解決」（1946）という視点を介して具体的な教育実践を方向付ける。この点について本研究では、城戸の「教育課程の自主編成」の議論と「生活道徳」の議論の検討を通じて取り組んだ。城戸の思想においては、「生活問題の解

決」を志向する点では科学を必要とする一方で、その問題の解決を規定する「生活」という具体的な場があり、その両者の関係が教育実践を構想する上で基底にあることが明らかにされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田岡昌大	4. 巻 304
2. 論文標題 変わりながら変わらないもの 城戸幡太郎の保育思想を読み直す	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊 保育問題研究	6. 最初と最後の頁 8-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲井智義・山田真由美・桑嶋晋平・田岡昌大・渡辺真之	4. 巻 29
2. 論文標題 1970年代教育学の諸相 戦後日本教育思想史を読み直す	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 156-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20552/hets.29.0_156	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田岡昌大	4. 巻 41(1)
2. 論文標題 保育思想における「生活」概念に関する試論的考察 倉橋惣三と城戸幡太郎における「生活」概念と実践性について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20789/jraps.41.1_36	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田岡昌大
2. 発表標題 城戸幡太郎の教育科学における「立場」と実践
3. 学会等名 北海道教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田岡昌大
2. 発表標題 道徳教育と「食育」の関係に関する一考察 城戸幡太郎の「生活道徳」を視点として
3. 学会等名 日本教育学会第81回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田岡昌大
2. 発表標題 城戸幡太郎における「心理学への郷愁」と教育課程の自主編成
3. 学会等名 教育思想史学会第29回大会 コロキウム7「1970年代教育学の諸相 戦後日本教育思想史を読み直す」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷口智弘、田岡昌大
2. 発表標題 共通教育としての高校教育についての検討 城戸幡太郎と正則高等学校における教育課程の自主編成
3. 学会等名 北海道教育学会第64回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大泉博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 クレス出版	5. 総ページ数 258
3. 書名 日本の子ども研究 復刻版解題と原著論文	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------